

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 31日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22659412

研究課題名（和文） 小児救急医療に対する保護者の安心と適正利用を推進する子育て支援の検討

研究課題名（英文） Parenting supports to promote the safety of parents and the proper use of emergency medical care for children

研究代表者 祖父江 育子 (SOBUE IKUKO)

広島大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：80171396

## 研究成果の概要（和文）：

病児病後児保育は親に対する相談や教育的機能を持ち、病児に対する親の対処能力を高める役割を担っていた。また、小児の QOL、特にひとり親の小児の QOL において有益であった。離島居住の核家族は、救急受診できないために早めの受診を心がけており、小児救急電話相談を利用していた。保護者は救急搬送時にヘリコプターや船が救急機器を備えていないことへの不満や不安が強かった。本研究結果は、医療機器を配備した救急搬送法の完備と、救急受診に関連したケアの重要性を示唆する。

## 研究成果の概要（英文）：

The study revealed that child-care for sick and convalescent children have the role of consultation and the education for parents with sick children, and bear the responsibility of developing parents' coping ability with their children's disease. They are beneficial for the QOL of children, especially, single mothers' children.

Living on an isolated island and a nuclear family consulted a hospital as early as possible, because they could not use emergency medical care. Also, they used pediatric emergency telephone counseling services. The parents felt anxious and dissatisfied because the helicopter and the ship were not equipped with emergency care equipment. The results suggest the importance of transportation means equipped with emergency care equipment and care services to relate with emergency treatment.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	540,000	3,340,000

研究分野：小児看護学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：小児看護学、小児救急医療、子育て支援、離島、病児病後児保育

## 1. 研究開始当初の背景

少子化、核家族、共働きによる育児力の低下と保護者の完結医療の希望は、二次救急医療施設（基幹病院）へのコンビニ医療を増大させ、小児救急医療の疲弊を招いている。日本小児科学会の広域圏 24 時間 365 日の小児救急医療構想は実施率が低く、小児救急医療には多様な不整備状況が混在している。北米も救急受診児の約 90%が非緊急であり、軽症受診群として若年の親や第 1 子、ひとり親が報告されている。しかし、わが国の知見の大部分は、特定の小児救急医療施設や医療圏の実態報告である。実行可能で公平な小児救急医療を整備するために、小児救急医療整備状況や家族形態による比較検討が必要である。

香川県は完結医療実施医療圏（24 時間 365 日 1 次・2 次・3 次救急医療を 1 施設が実施）から離島まで多様な小児救急医療体制を実施し、多彩な子育て支援事業を展開している。小児救急医療の整備状況や家族形態による小児救急医療へのニーズを比較検討し、小児救急医療における子育て支援の効果を明らかにするため、平成 21 年 1～3 月香川県全域で 34,606 名を調査した。有効回答者 17,374 名の小児救急医療への不安や受診状況は小児救急医療の整備状況や家族形態と関連しており、完結医療実施医療圏は不安が低く低リスク、離島は高リスクであった。また、ひとり親（母）は小児救急医療に対して強い不安や不満があり高リスク、祖父母同居の場合は低リスクであった。

そこで、リスクの低減、医療の公平化と子育て支援の推進を目的にリスクに対応した子育て支援の実行可能性を展望するため、今回の研究を着想した。

## 2. 研究の目的

本研究は、小児救急医療の利用に関して高リスクの地域（離島）や家族（ひとり親）のリスク低減、医療の公平化と子育て支援の推進を目的に、リスクが異なる地域と家族形態を組み合わせる質的に調査し、リスクに対応して資源を効果的に投資できるよう、実行可能な子育て支援を考究した。

## 3. 研究の方法

リサーチ・クエスチョンを、「小児救急医療のリスクは、小児救急医療未整備状況と家族形態の組み合わせで生じる」「病児病後児保育は、ハイリスク家庭（ひとり親・共働きの核家族）の子育ての負担や小児救急受診を軽減する」と設定した。小児救急医療のリスクを解決し、コンビニ受診を予防する支援に

ついて仮説生成できるよう、質的研究法（エスノグラフィー）を用いて、離島調査、病児病後児保育利用者調査を半構造化面接によって重層的に実施した。

香川大学医学部倫理委員会の承認および病児病後児保育施設の承認と協力を得て、書面によるインフォームド・コンセントを得た対象者に、以下の調査を行った。

### 1) 離島調査

A 島（診療所のみ）、B 島（2 病院に 3 名の小児科医が勤務）、対照群として C 医療圏（完結医療実施医療圏）を選択し、2011 年 2 月～3 月、本研究のために作成したホームページと保育所・保健所におけるポスター掲示、スノーボール方式で対象者を募集した。6 歳未満の小児をもち、書面によるインフォームド・コンセントを得た母親を対象とし、A 島では母親 7 名に半構造化面接を、母親 8 名にフォーカスグループインタビューを実施した。B 島は母親 12 名と父親 2 名、C 医療圏は母親 18 名に半構造化面接を行った。調査内容は、育児状況（悩みと対処・育児支援者・利用サービス等）、子どもが病気やけがをした際の対処と育児支援者や利用サービス、小児救急医療の利用状況（症状・治療・受診理由・搬送法とニーズ等）であった。

### 2) 病児病後児保育調査

ホームページ、香川県内の病児病後児保育施設 8 施設におけるポスター掲示と配布によって参加者を募集した。2011 年 4 月～5 月に、病児病後児保育の利用経験があるひとり親（母）10 名、共働きの核家族の母親 27 名、父親 1 名に半構造化面接を行った。調査内容は、育児状況（悩みと対処・育児支援者・利用サービス等）、子どもが病気やけがをした際の対処と育児支援者や利用サービス、小児救急医療の利用状況（症状・治療・受診理由・搬送法とニーズ等）、病児病後児保育の利用状況（利用児の年齢・症状・利用時間・利用日数・費用・利用理由）と利用児の反応、ニーズ等であった。

## 4. 研究成果

### 1) 離島調査

#### (1) A 島における小児救急医療へのニーズ

A 島の母親の悲憤は、検査を要する症状の際は島外受診となり、マリンタクシーとタクシーの併用による高額自己負担と長時間の搬送、県外を受診した際の煩雑な事務手続きであった。また、転勤のため島外から移住している核家族の母親は相談相手がなく、救急電話相談が重要な相談窓口であるが、救急電

話相談にかけてもつながらない（話中）と訴えた。

## (2) B島の小児救急医療ニーズ

2病院とも全科の医師が救急医療を担当しているため、救急時の診察が小児科医と限らない状況であった。母親は、休日・祝日前には早めに外来受診する、深夜等の受診を避け病児の様子をみて翌日昼に救急受診するなど、小児科医に受診できるよう工夫していた。また、子どもの安全と安心のため病児病後児保育や学童保育へのニーズが大きく、労働状況に応じた柔軟な保育所・幼稚園の選択を望んでいた。

## (3) 3次救急医療へのニーズ

B島において、痙攣重積児の両親（母親30代、父親40代）と、肺高血圧症の新生児の母親（40代）に、半構造化面接を行った。島外の3次救急施設（大学病院）への搬送に関して、防災ヘリは救急機器を搭載しておらず夜間飛行できないこと、マリntaxーも救急機器を搭載しておらず長時間を要し高額な自費負担となることに強い不安と不満をもっていた。3次救急施設へのアクセスの不便に対して、対象者は病院での宿泊、メールでの病状報告・相談、港から病院への直通バスを希望していた。

また、対象者は小児が退院した後の大学病院受診時の保健師による相談と指導、自宅での保健師による電話相談に大きな安心を得ていた。

### 結論

本研究結果は、医療機器を配備した救急搬送法の完備と、救急受診を回避できる子育て支援、救急受診後のケアの重要性を示唆する。

## 2) 病児病後児保育調査

### (1) ひとり親（母）調査

ひとり親（母）10名は  $31.8 \pm 2.94$  歳、子ども数は  $1.8 \pm 1.03$  人、子どもの年齢は  $4.78 \pm 2.88$  歳であった。

#### ① 病児保育の評価

病児病後児保育施設では、医療・看護ケアとして医師による診察と与薬、感染症の隔離、看護師による吸入・吸引・与薬、保育ケアとして楽しい遊びと温かくおいしい食事やおやつ、マンツーマンのケア、詳細な病状や生活の記録と保護者への報告、親への指導が行われていた。利用児は病児病後児保育に対してポジティブな反応（楽しさや喜び、安心）を示していた。

母親は、病児病後児保育の利用によって、子どもが無理をしなくてすみ、回復が早く、症状をぶりかえさないと評価していた。また、感染症などを恐れて、子どもの生活をセーブ

しなくてよくなったと認識し、専門職によるケアと子どもの反応に大きな安心と満足をもっていた。

#### ② 母親の就労状況

母親は非正規職4名、土日祝日勤務4名であった。病児病後児保育の利用による遅刻や早退を経験しており、利用者制限や待機による欠勤と収入の減少、遠距離利用による遅刻や早退の解決を求め、施設数の増加、不規則な勤務に対応できる延長保育、休日祝日保育、夜間保育を希望していた。

費用に関して高額（低収入、兄弟も同時に利用、連続利用、慢性疾患）と認識しており、公的対処（保険、部分還付、勤務先の補助）を希望していた。

## (2) 共働きの核家族

病児病後児保育利用の理由は、体調不良の子どもに無理をさせたくない、仕事を休まなくてよい、祖父母の負担への配慮であった。病児病後児保育に対して、母親は与薬や吸入などの医療的ケアの確実な実施により家庭で看るよりも治療効果が大きいと実感し、安心していた。母親は子どもの病状に対する対処等について医師や看護師・保育士から指導を受けており、家庭でも安心して病気の子どもの看ることができていた。また、保育士の遊びの援助によって子どもが楽しみながら療養していることを実感していた。

### 結論

ひとり親（母）、共働き核家族の母親は、病児病後児保育によるケアに安心を得ており、相談や教育的機能によって病児へのケア能力を向上させていた。また、病児病後児保育は、ひとり親（母）の子どもの健康と発達を保証し、ひとり親（母）の精神的健康に寄与していた。ひとり親（母）のニーズが雇用と収入の脆弱性によることから、現在と将来のQOLを保証するために、病児病後児保育の運営に対する行政支援が必要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計7件）

1. Ikuko Sobue, Junko Ohashi, Mayumi Yamamoto, Chizuko Edagawa, Kimie Tanimoto, Susumu Itoh, Needs for Pediatric Emergency Care on a Remote Island, The 8<sup>th</sup> Congress of Asian Society for Pediatric Research, 17-19, May, 2012, Seoul, KOREA

2. Ikuko Sobue, Chizuko Edagawa, Atsuko Nishioka, Junko Ohashi, Kimie Tanimoto,

Susumu Itoh, The needs of single mothers for child support, The 8th Congress of Asian Society for Pediatric Research, 17-19, May, 2012, Seoul, KOREA

3. Ikuko Sobue, Junko Ohashi, Mayumi Yamamoto, Susumu Itoh, Needs for tertiary emergency care on a remote island, 2nd International Nursing Research Conference 2012, 9-10 Feb 2012, Kuala Lumpur, MALAYSIA

4. Chizuko Edagawa, Ikuko Sobue, Atsuko Nishioka, Susumu Itoh. Source of information child-raising for single mothers, 2nd International Nursing Research Conference 2012, 9-10 Feb 2012, Kuala Lumpur, MALAYSIA

5. Ikuko Sobue, Chizuko Edagawa, Atsuko Nishioka, Yoshiko Kobayashi, Kaoru Tobiume, Kiyoshi Nishikawa, Hitomi Hashimoto, Toshiko Sasaki, Masahito Miyazaki, Masato Kuzuhara, Susumu Itoh, Single mothers' needs associated with child-care for sick and convalescent children, 1st PNAE Congress on Paediatric Nursing, 1-2, Dec 2011, Istanbul Turkey

6. Ikuko Sobue, Chizuko Edagawa, Atsuko Nishioka, Yoshiko Kobayashi, Kaoru Tobiume, Kiyoshi Nishikawa, Hitomi Hashimoto, Toshiko Sasaki, Masahito Miyazaki, Masato Kuzuhara, Susumu Itoh, Benefits of child-care for sick and convalescent children associated with the QOL of single mothers' children, 1st PNAE Congress on Paediatric Nursing, 1-2, Dec 2011, Istanbul Turkey

7. Chizuko Edagawa, Ikuko Sobue, Atsuko Nishioka, Yoshiko Kobayashi, Kaoru Tobiume, Kiyoshi Nishikawa, Hitomi Hashimoto, Toshiko Sasaki, Masahito Miyazaki, Masato Kuzuhara, Susumu Itoh, Effects of using day care centers for sick and convalescent children on the quality of children's health care in dual-income nuclear families, 1st PNAE Congress on Paediatric Nursing, 1-2, Dec 2011, Istanbul Turkey

[その他]  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

祖父江 育子 (SOBUE IKUKO)  
広島大学・大学院保健学研究科・教授  
研究者番号：80171396

### (2) 研究分担者

谷本 公重 (TANIMOTO KIMIE)  
香川大学・医学部・教授  
研究者番号：10314923

枝川 千鶴子 (EDAGAWA CHIZUKO)  
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・准教授  
研究者番号：00363200

伊藤 進 (ITOH SUSUMU)  
香川大学・医学部・教授  
研究者番号：80145052

三上 順子 (MIKAMI JUNKO)  
滋賀県立大学・人間看護学部・助手  
研究者番号：90524059  
(H22)

### (3) 連携研究者

( ) なし  
研究者番号：